20091018新聞配達の少女

ご近所を歩くと、回収待ちの古新聞を戸口で見かける。弊紙であればもちろん、他紙でもお宅に一礼する癖がついた。無料の情報があふれる時代、新聞代を払ってくださる読者は社を超えて大切にしたい▼

我在贵府附近散步时，经常看见有的人家门口堆着旧报纸，准备卖旧货。久而久之，我养成了一个习惯，不管这报纸是不是我们报社的，我都会对他家鞠躬行礼。现在是免费信息大泛滥的时代，我们应该感谢那些肯花钱订报的客户。

感謝の念はおのずと新聞を配る人にも向かう。日本の新聞の９５％は戸別配達されている。「新聞配達の日」のきょうは、日本新聞協会が募ったエッセーから紹介したい▼

今天是“送报日”，日本95%的报纸是由那些送报人挨家挨户投递的，我们当然也应该感谢他们。下面介绍几则日本报纸协会征集来的随笔文章。

北海道苫小牧市の亀尾優希さん（９）は、母の新聞配りを手伝う。貧血気味のお母さんは団地の３階まで、娘は４階と５階。「家に帰ったら、お父さんのおべんとうにいれるたまごやきを作ります。こうして、わたしの一日ははじまります」。小さな働き者を真ん中に、固く結ばれた家族が浮かんでくる▼

北海道苫小牧市的亀尾優希同学（9岁）就在帮母亲送报纸。每到一个小区，4楼5楼優希送，3楼以下由贫血的母亲送。“回家以后，就煎鸡蛋给爸爸装盒饭。我的一天就这样开始了”。我的眼前浮现出一个以小报童为纽带，紧紧连在一起的贫穷但很幸福的小家庭。

「インターネットでは得られない情報が、伝える人と届ける人の誠意の集大成として新聞になる」。そう書いてくれたのは、東京都文京区の岩間優（ゆう）さん（１４）だ。足の悪いお年寄りが新聞を心待ちにしていると知り、単なる「記事の集まり」を超えたぬくもりを感じたという▼

“报纸与网络不同，它还包含着撰稿人与送报人的诚心诚意”。这话是东京都文京区岩间优同学（14岁）写的。他说他认识一个腿脚不方便的老人，每天都在等报纸，报纸对他而言，不仅仅是新闻大拼盘，而是一份关爱，一份温暖。

人の手で運ぶ新聞が温かいのは自然なことかもしれない。今年の新聞配達の代表標語も〈宅配で届くぬくもり活字の重み〉である。凍える朝でも嵐の夕でもいい。情報の重い束を運ぶ４２万人に思いをはせたい▼

也许正是这个原因吧，今年“送报日”的主题标语是“送报送温暖，铅字分量重”。无论是天寒地冻的早晨，还是狂风暴雨的黄昏，每天都有42万送报人，活跃在送报的第一线，这种情景让人感动。

新聞社はネットでも発信しているが、そこで再会するわが文は心なしか「誠意」を割り引かれている。特にコラムの場合、体裁の違いはそれほど大きい。どうか小欄は、ぬくもりを添えてお届けする「縦書き」でお読み下さい。

报社也把报纸内容上传网络，但是在那里看到的自己的文章总觉得缺少点【诚意】。尤其是天声人语差别就更大了，网络上不是纵书，而是横书。所以请大家还是看报纸吧，那里能感受到关爱、诚意。